

一般住民の性意識と性行動に関する研究

内野 英幸*

HIV 感染リスク性行動の実態を明らかにするために、長野県 K 市住民の20歳以上60歳未満の23,700人から無作為抽出した200人に対して性行動と性意識に関する訪問面接調査を実施した。調査に答えた156人(回答率78.0%)の回答結果を集計し統計学的な解析を行い、また、性行動調査方法に関して検討を加えた。

HIV 感染リスク性行動の指標の一つとして、性交渉相手(以下、パートナーと表す。)数でみると、2人以上の複数パートナーを有したものは、「今まで」に男性65.3%、女性37.0%、「過去5年間」に男性37.5%、女性12.5%、「過去1年間」に男性19.1%、女性4.2%、となっており、女性よりも男性の方が複数パートナーの割合は高くなっている。年齢層別比較では、複数パートナーを有する割合は男女ともに20歳代の若い層でもっとも高くなっていた。パートナー数の増加に関連する因子として男女ともに初回性交渉年齢18歳以下、男性では自営業種、作業系・農林業種、女性では高学歴があげられた。性行動調査を実施するに当たった留意点は以下のとおりである。

1. 回答者の心理的背景

人のプライバシーや私生活に深く関わる性の調査では、調査員はセックスカウンセリング的な能力が求められる。回答者は性に関して受容的かつ活発な人に偏る傾向があり、調査結果は性行動の過大評価となりがちである。

2. 性行動調査のすすめ方

調査は、調査員が調査相手に調査の主旨を十分に説明し信頼関係をつくった上で実施すべきである。依頼文と質問紙を調査相手に一方的に送付して回収する方法は、原則として採るべきではない。

Key words : 性行動, 住民調査, HIV 感染リスク, 複数パートナー, 調査評価

I はじめに

人の性行動は生物学、心理学、社会学的な面でもっとも研究されていない領域の一つである。従来、一般住民における性的習慣(性生活)の信頼できるデータは極めて少なかった。調査標本がボランティアであったり、回収率が極めて低い偏りのある集団となってしまう、一般住民を代表しているとはとてもいえなかった。加えて、性へのマイナスイメージが研究者の調査を慎重にさせ、この分野の発展を阻害していた¹⁾。しかし、エイズの出現とその原因である HIV が性的接触で感染することがきっかけとなり、性行動調査の正当性をもたらし、多くの研究者が性行動の分野において科学的調査としての質的改善方法を試み^{2~7)}信頼できる情報として国際比較もなされるようになってきた^{7~11)}。

人の性行動や性意識は、社会環境の影響を受けており、地域の性文化を反映しつつ時代背景の影響も受けながら変遷をとげている。そこで、我々は欧米で主流となっている^{2,3)}回答者の確認が可能な個人面接法を用いて、一般住民の HIV 感染リスクとしての性行動と性意識の実態を把握し、それに関連する要因などを分析し国際比較を試みた。また、調査員が調査相手を訪問することで性意識や性行動といった人のプライバシーに深く立ち入る調査の情報収集に影響する因子や、より精度の高い調査法、実際の調査のすすめ方について検討を行うことも狙った。

II 研究方法

調査標本は、長野県 K 市住民40,530人の住民台帳より20歳以上60歳未満を対象に選んだ23,700人のリストから、正10面体のサイコロを振って出発点をランダムに決め119人おきに対象者を199人抽出し、最後に不足した1人を再度サイコロを振って抽出した計200人である。調査は、訪問し個

* 長野県大町保健所
連絡先: 〒398 長野県大町市大町1058-2
長野県大町保健所 内野英幸

人面接で行い、訪問の約1週間前に「性行動と性意識に関する調査のお願い」の調査協力依頼書を封書で調査相手の本人宛に郵送した。調査員は研究班員が中心となって、保健所の保健婦や事務職員、雇い上げの保健婦、看護学生、保健婦学生などで構成され、班員と保健婦がリーダーとなって学生と事務職員がアシスタントで付き添い、男女のペアで訪問した。スタッフ数はリーダー4人とアシスタント23人の計27人であった。訪問前に相手に電話はせずに、第一回の訪問は調査相手宅の確認と本人を確認し調査主旨の説明程度とした。調査協力の了解がとれれば、都合を聞いてそのまま調査ができる場合と、後日予約して再訪問となる場合がある。本人が不在でも、家族と会えれば本人の都合を尋ね、本人も家族も不在であれば再度訪問する旨書いた伝言メモを郵便受け箱に入れて第一回の訪問を終了とした(図1)。

面接調査は、原則本人宅に入室しテーブルをはさんで調査員と被調査者が対面の面前自記とした。そこで、まず、調査員が質問紙全般で記入上の注意点や性的用語の補足説明を簡単に行ってから記入を開始してもらった。相手が記入中、調査員は読み物や書き物をしながら見て見ぬ振りの雰囲気待った。ただし、記入途中で不明の点があれば、その都度尋ねてもらえば調査員持参の質問紙に照らし合わせて答える旨を伝えた。なかには50歳代の者で字が読みづらい、言葉が難解で困惑し本人が読んで理解できにくいケースでは調査員が読み上げながら説明し、本人に記入してもらう方法を採用した。記入終了の質問紙は回答者の面前で持参の封筒に密封回収し、いかがでしたかと簡

単な言葉のやりとりをして、お礼の500円のテレホンカードを渡して辞退した。

調査実施期間は、44日間で標本を概ね50人単位の4グループに分けて、10日間で1グループの調査を終了し、特に土日に集中して訪問調査を実施し回収率の向上を図った。最初は拒否や相手が不在であっても、訪問は少なくとも3回は行い、説得や本人に面接するよう心がけた。しかし、訪問の打ち切りや留め置き調査に変更するタイミングは個々人の反応、背景などを考慮して調査員がケースバイケースで判断した。特に面前記入の利点は、調査員が回答者の面前にいることによって回答者は真剣に設問をとばすことなく記入することにある。アメリカ、イギリスではよりプライベートで答えづらい微妙な性行動に関しては、本人に渡して自記回答する質問紙と、調査員が聞き取り記入する質問紙の2種類を作成している^{2,3)}。一方、自宅に入室できずに玄関で待機し回収した場合、回答精度は面前記入よりも劣るとの印象を我々は持っている。

調査票に答え回収できたものは156人(男性77人、女性79人、平均年齢40歳)で回収率は78.0%であった。このうち面前自記回答が8割(126人)、止むを得ず留め置き自記回答となったものが2割(30人)であった(図2)。回収率の男女別、年齢別の比較では女性の方が回収率は高く、20歳代の回収率がもっとも低かった。調査票の回収できなかった44人の内訳は男性が27人(26.0%)、女性が17人(17.7%)であった(表1)。調査不能者44人中、転居や住所不明などにより調査ができなかったものが9人、本人や家族に接触できな

図1 訪問面接チャート

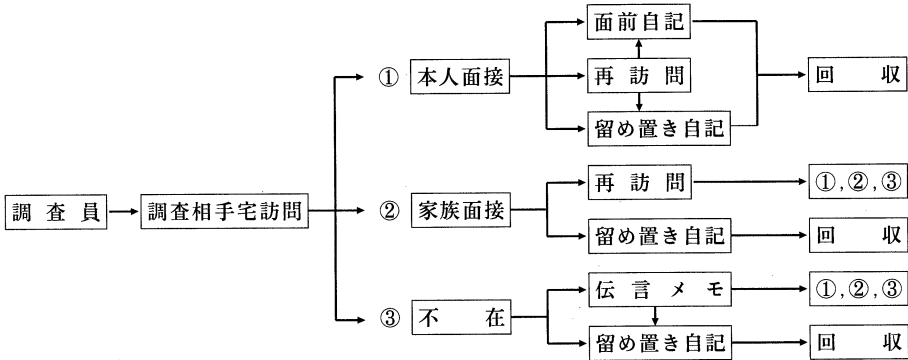


図2 標本（調査対象者）と回収結果

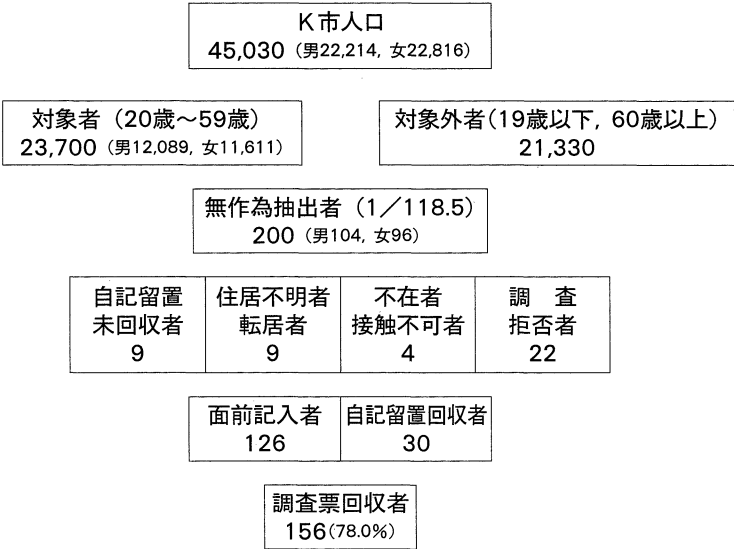


表1 回収率の年齢別・性別比較

	20代	30代	40代	50代	計
男	19/26 (73.1%)	20/28 (71.4%)	17/23 (73.9%)	21/27 (77.6%)	77/104 (74.0%)
女	17/22 (77.3%)	16/19 (84.2%)	25/29 (86.2%)	21/26 (80.8%)	79/96 (82.3%)
計	36/48 (75.0%)	36/47 (76.6%)	42/52 (80.8%)	42/53 (79.2%)	156/200 (78.0%)

かったものが4人、留め置きで回収できなかったものが9人、明らかな調査拒否者が22人であった(図2)。調査拒否の理由は、調査内容11人(50%)、とにかく拒否9人(40%)、忙しい5人(23%)、心身の障害4人(18%)、と拒否の理由は調査内容が半数を占めていた。また、調査拒否者は男女共に11人いたが、その割合は、40歳代男性(17.4%)と50歳代女性(15.4%)が高く、20歳代が4.2%と最も低かった(表2)。1人あたりの訪問回数は1回が39.1%、2回が41.1%、3回が16.1%、平均訪問回数は1.8回であった。回答記入時間は短いもので10分、長いものは60分かっており、20分以内が43.7%、30分以内が83.8%を占め、平均回答時間は25分であった。なお、調査票は欧米の調査票などを参考にしながらエイズ、性と社会、性意識、性生活歴、性交渉相手(以下、パートナーと表す。)、性感染症、健康、

表2 調査拒否者の年齢別・性別比較

	男 性	女 性	計
20代	0/26(0.0)	2/22(9.1)	2/48(4.2)
30代	4/28(14.3)	2/19(10.5)	6/47(12.8)
40代	4/23(17.4)	3/29(10.3)	7/52(13.5)
50代	3/27(11.1)	4/26(15.4)	7/53(13.2)
計	11/104(10.6)	11/96(11.5)	22/200(11.0)

* 調査拒否者/調査対象者 (%)

プロフィールなどに関連した設問56項目から構成され、A4で15ページの分厚いものになった。集計データは膨大なものになったが、パートナーとそれに関連する因子に焦点を絞って分析を行った。統計処理はSPSSを用いて行った。

Ⅲ 研究結果

「今まで」に膣ペニス性交パートナーはいなかったと男性の14.7%、女性の13.7%が答えており、特に20歳代男性では「今まで」にパートナーはいないと26.3%が答え、男女年齢層別でもっとも高くなっていた。膣ペニス性交を持ったパートナーに関して、2人以上の複数パートナーと答えたものが「今まで」に男性65.3%、女性37.0%、「過去5年間」に男性37.5%、女性12.5%、「過去1年間」に男性19.1%、女性4.2%であった。さらに、5人以上の複数パートナーと答えたものは

「今まで」に男性36.0%，女性8.2%，「過去5年間」に男性19.4%，女性2.8%，「過去1年間」に男性5.9%，女性0%となっている。長期および短期においても複数パートナーや5人以上の多数パートナーありと答えた割合は女性よりも男性の方が高くなっていた。年齢層別にみると，「過去5年間」と「過去1年間」に複数パートナーを有するものが男女共に20歳代がもっとも高くなっており，また，「過去5年間」に5人以上のパートナーと答えたものも，20歳代の男女それぞれ26.4%と12.5%と他の年齢層に比して高くなっていた。一方，20歳代の男性では，パートナーがいらないと答えた割合がもっとも高くなっており，性活動が活発なものとそうでないもの両極に分かれていた。「過去5年間」に複数パートナーを有したものは，40歳代男性の21.4%，50歳代男性の31.6%であったが，一方，40歳以降の女性では，0%と男女で大きなちがいがみられた（表3）。

主な調査項目の結果を表4に示した。初回性交（以下，初交と表す。）年齢は男女ともに若い世代ほど低年齢化しており女性の方がその低年齢化が顕著である（図3，図4）。初交相手は男女ともに若くなるほど恋人の割合が高くなり，40歳代以降の女性の大半は配偶者と答えていたが，30歳代と20歳代の女性になると大半が恋人に大きく逆転していた。30歳代以降の男性の1割から2割が初交相手として金銭を介したパートナーと答えていたが，20歳代の男性になると金銭を介したパートナーがなくなり行きずりのパートナーと答えたものが2割と多くなっていた。初交時のコンドーム使用に関して男性は50歳代を除けば全年齢層で使用率は半数をこえていたが，女性は若いほど使用率が上昇し20歳代では7割近くになっていた。「過去5年間」に金銭を介したパートナーありと答えたものは男性で平均13.8%であった。30歳以降の男性の5人に1人が今までに性行為を介した病気

表3 膣ペニス性交パートナーの年齢別，性別比較

年 齢	男 性					女 性				
	20-29	30-39	40-49	50-59	総 数	20-29	30-39	40-49	50-59	総 数
今まで										
0	26.3%	5.0%	6.3%	20.0%	14.7%	12.5%	7.1%	13.0%	20.0%	13.7%
1	10.5	10.0	37.5	25.0	20.0	18.8	28.6	73.9	60.0	49.3
2	15.8	5.0	0.0	5.0	6.7	18.8	21.4	8.7	0.0	11.0
3-4	21.1	35.0	18.8	15.0	22.7	31.3	21.4	4.3	20.0	17.8
5-9	21.1	25.0	6.3	20.0	18.7	18.8	14.3	0.0	0.0	6.8
+10	5.3	20.0	31.3	15.0	17.3	0.0	7.1	0.0	0.0	1.4
人数	n19	n20	n16	n20	n75	n16	n14	n23	n20	n73
過去5年										
0	31.6%	5.0%	14.3%	21.1%	18.1%	12.5%	6.7%	13.6%	26.3%	15.3%
1	15.8	55.0	64.3	47.4	44.4	50.0	73.3	86.4	73.7	72.2
2	26.3	15.0	0.0	5.3	12.5	12.5	6.7	0.0	0.0	4.2
3-4	0.0	10.0	7.1	5.3	5.6	12.5	13.3	0.0	0.0	5.6
5-9	21.1	5.0	14.3	15.8	13.9	12.5	0.0	0.0	0.0	2.8
10+	5.3	10.0	0.0	5.3	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人数	n19	n20	n14	n19	n72	n16	n15	n22	n19	n72
過去1年										
0	38.9%	10.0%	18.2%	26.3%	23.5%	18.8%	6.7%	13.6%	26.3%	16.7%
1	33.3	70.0	81.8	52.6	57.4	68.8	86.7	86.4	73.7	79.2
2	16.7	0.0	0.0	15.8	8.8	12.5	6.7	0.0	0.0	4.2
3-4	5.6	10.0	0.0	0.0	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5-9	5.6	5.0	0.0	5.3	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
10+	0.0	5.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人数	n18	n20	n11	n19	n68	n16	n15	n22	n19	n72

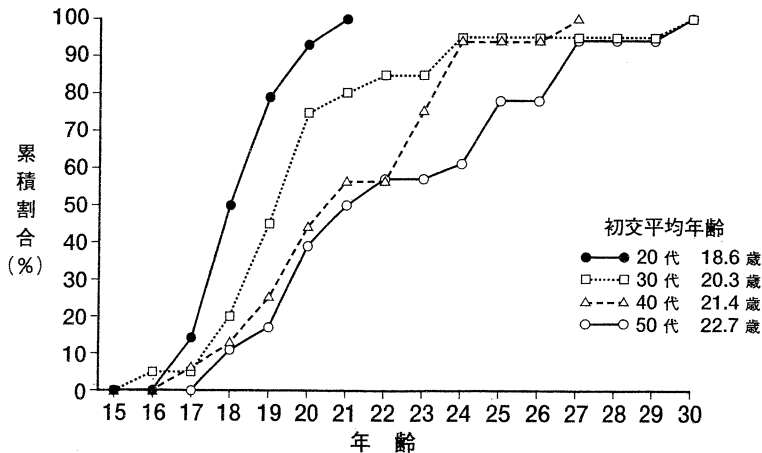
表 4 主な調査項目の結果

	男 性				女 性			
年齢層	20-29	30-39	40-49	50-59	20-29	30-39	40-49	50-59
初回性交平均年齢（歳）	18.6	20.3	21.4	22.7	17.9	20.7	22.8	24.0
初回性交相手								
配偶者	6.7%	4.8%	6.3%	10.5%	6.3%	13.3%	68.2%	76.2%
婚約者	0.0%	4.8%	18.8%	26.3%	6.3%	6.7%	13.6%	0.0%
恋 人	60.0%	38.1%	31.3%	10.5%	81.3%	66.7%	13.6%	23.8%
友 人	6.7%	9.5%	12.5%	31.6%	0.0%	6.7%	4.5%	0.0%
顔見知り	6.7%	19.0%	12.5%	10.5%	6.3%	6.7%	0.0%	0.0%
行きずり	20.0%	4.8%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
売春婦	0.0%	19.0%	12.5%	10.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
初回性交時コンドーム使用	64.3%	57.1%	68.8%	16.7%	68.8%	40.0%	22.7%	15.0%
過去 1 年間に性交時コンドーム使用	90.9%	60.0%	40.0%	38.5%	50.0%	57.1%	62.5%	35.7%
過去 5 年間に売春婦との性交経験	16.7%	16.7%	8.3%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
今までに STD クリニック受診	0.0%	19.0%	18.8%	20.0%	11.8%	6.7%	4.3%	0.0%
月に 1 回以上の性交*	73.3%	80.0%	53.3%	61.1%	75.0%	64.3%	70.0%	45.0%
婚前性交渉に反対	10.5%	42.9%	43.8%	76.2%	25.0%	33.3%	87.0%	90.5%
エイズによって性行動が変化								
相手を少なくする	0.0%	0.0%	6.3%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
特定の一人にする	0.0%	4.8%	18.8%	9.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
性交回数をへらす	5.3%	0.0%	18.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
相手をよく知る	15.8%	19.0%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
コンドームを使用	21.1%	28.6%	31.3%	4.8%	5.9%	6.7%	4.2%	0.0%
なんらかの変化（総計）	26.3%	38.1%	56.3%	19.0%	5.9%	6.7%	4.2%	0.0%

* 過去 1 年間の性交頻度

図 3 初回性交年齢の年代別累積割合 —男性—

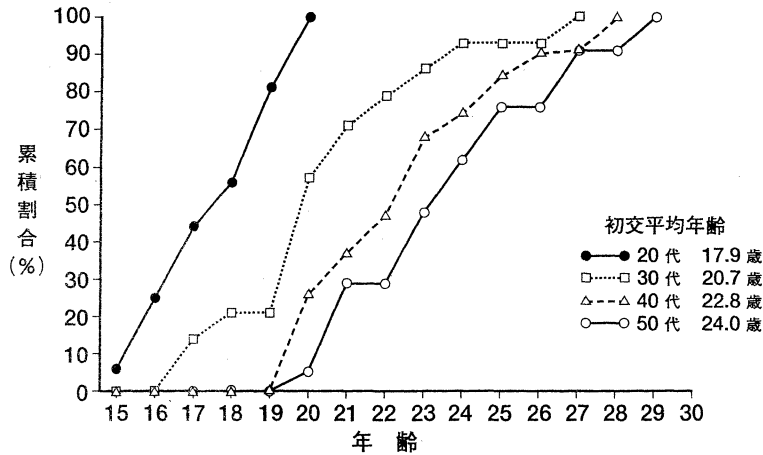
*対象者は性交経験者とした。



で医療機関を受診したことがあると答えていた。婚前性交渉に対して反対の立場のものが年齢が高くなるほど上昇し特に40歳代以降の女性では9割前後と高くなっており、一方、20歳代と30歳代の

女性ではそれぞれ4分の1と3分の1が反対の立場をとっており、女性は40歳を境にして大きな性意識の差がみられた。エイズが話題になって自分の性行動を主体的に変えたと答えたものは、男性

図4 初回性交年齢の年代別累積割合 —女性—
*対象者は性交経験者とした。



の33.8%に対し、女性は3.9%と極めて少なかった。変化した点としては、コンドームを使用するようになったと答えたものがもっとも多かった。

性的パートナー数に影響する因子をロジスティック回帰モデルを用いたステップワイズ法によって要因分析を行った。「過去5年間」でパートナーが2人以上であることに寄与する要因を男女別にみると、男性では関連因子は親と同居していること、作業系・農林業種であること、自営業であること、初交年齢が18歳以下であること、一方、女性の関連因子は大学卒であること、初交年齢が18歳以下であることであった(表5)。

表5 過去5年間で性的パートナーが2人以上に寄与する関連因子

	オッズ比	95%信頼区間	有意水準
<男性>			
・親と同居	5.78	1.14-29.35	p=0.047
・作業系・農林業種	14.90	0.76-281.94	p=0.072
・自営業種	30.37	1.58-585.47	p=0.024
・初交年齢18歳以下	24.38	1.68-367.83	p=0.019
<女性>			
・大学卒	23.48	1.05-527.16	p=0.047
・初交年齢18歳以下	37.56	3.49-404.52	p=0.003

* 各因子でない場合を基準値1とした。

Ⅳ 考 察

1. HIV 感染リスク性行動としての特徴と国際比較

HIV 感染リスク性行動の一つの指標としてパートナー数があげられる。我々の調査では、2人以上の複数パートナーと答えたものは、「今まで」に男性の3人に2人、女性の3人に1人、「過去5年間」に男性の3人に1人、女性の8人に1人となっている。今回の調査結果は、諸外国の結果と同様に、HIV 感染リスク性行動としてのパートナー数は女性よりも男性の方が高く、両性ともに20歳代の若い層で特に高くなっていることが確認された^{2~4,8)}。

我々の性行動の調査結果は標本数が少ない上に日本の一地域のデータに過ぎず、我が国を代表し

ているとみなすことはできないが、国際比較してみると^{2~4,8)}、日本の性文化としての特徴がよく分かる。一つは、生まれてこのかたパートナーは一人であると答えたものが、40歳代と50歳代の日本人女性の8割をこえており、欧米の同世代女性の約6割に比べて2割程度高くなっており、我が国の40歳以降の女性の大半は生涯に渡って夫のみをパートナーとしていることである。二つめは、売春婦との性交経験者の割合が日本人男性は、「過去5年間」に10%台と欧米の5倍以上となっており、パートナーとして売春婦の関与度が高い点である。しかし、初交パートナーをみてみると、日本人女性の場合、20歳代の約8割と30歳代の7割近くが恋人と答えており、また、20歳代男

性は初交パートナーとして売春婦がなくなり、かわって恋人が6割と多くなっている。女性の高学歴化、社会進出などによる晩婚化や男女の交流の活発化などが背景となって、結婚にこだわらない男女の性的関係が20歳代、30歳代ではライフスタイルとなってきているためであろう。このことは、40歳代の女性の8割あまりが婚前性交渉には反対の意見であるのに、20歳代の女性になると2割前後と極端に反対意見が少なくなることからもうかがわれる。また、我が国の50歳代男性は、過去5年間に5人以上のパートナーを有した割合が12.5%と、諸外国の同世代の男性の3%から4%よりもかなり高くなっているのは⁸⁾、日本人男性は歳をとっても売春婦などと性交渉をもつ傾向が強いためであろう。つまり、我が国では旧来の性文化から新しい性文化への移行期にあるといえる。したがって、結婚前に若い男女が恋人や友人関係で性交渉をもつようになってはきているが、一旦結婚すると、女性は夫のみをパートナーとし、男性は中年以降になっても売春婦と性交渉をもつ我が国の性文化が、今の若い層でどのように推移していくのか観察が必要である。

2. HIV 感染リスク性行動に関連する要因

我々の分析結果からは、過去5年間の複数パートナーに関与する因子として、男女共に初交年齢が18歳以下となっており、初交年齢の低年齢化はHIV 感染リスク性行動と関連する要因とみなすことができる。今後、若年層での初交年齢の低年齢化¹²⁾と相まって、より早期の性交体験者へのHIV 感染予防対策は極めて重要といえる。また、男性は、職種として作業系・農林業種と自営業が、女性では大学卒が複数パートナーに関与していたが、地域特性かどうか他の地域との比較も必要である。しかし、若い女性では高学歴と婚前交渉の受容などによって複数パートナーを有するものが増加していることは予想される。しかもエイズによって性行動が変化したと答えたものが20歳代の若い女性では、5.9%と同年代の男性の26.3%に比して極めて低かったことなどから、若い女性でのHIV 感染予防意識が低いことが考えられる。したがって、若い女性をターゲットにした予防対策の推進には特に力を入れる必要がある。

3. 調査不能者の背景

性行動調査のデータを分析する際、いつも問題となるのがバイアスの関与度である^{13,14)}。特定集団や回答率の低い場合、偏った調査対象となり偏ったデータとなってしまう。したがって、一般住民を代表したデータとはみなすことができない。我々は訪問面接調査を少なくとも3回は行うことで、国際レベルの70%以上の回収率を達成すること、調査非協力者に説得を重ねその理由を把握することでより調査協力のできる工夫と非回答者の背景について学ぶことを旨とした。

性行動調査協力依頼書や伝言メモを相手が受け取った時点で、即、拒否の電話が9件あった。そのうち女性が7件で6件は40代以降であった。これら積極的に拒否の態度を示した人の大半は、①性は自分には関係ない、②病気である、といった理由であった。調査に対する過剰反応として中年女性から拒否の電話があったことが特徴であり、これらの人たちは生活の中に性に関わっていない背景がうかがわれた。これら強い拒否的態度者への訪問は無理だと判断し、調査中止となることが多かった。また、訪問し家族に面会した際、本人が拒否していますからといわれれば、それ以上の働きかけができずに終わってしまうこともあった。一方、調査に拒否の態度であった53件中、何回も訪問を重ねていくうちに次第に受け入れてくれ調査が実施できたケースが32件あった。つまり、調査に協力してもらうには、調査員と被調査者との信頼関係をつくることがポイントになる。また、このような調査では家族の理解と協力も必要になるが、家族が受け入れても本人が拒否したり、家族が拒否しているので本人が協力したくともできないなどさまざまであった。

以上、性行動調査に対する拒否理由は、(1)とにかく調査は嫌である、(2)忙しい、(3)心身の病気、障害、(4)エイズに関わりたくない、(5)性行動調査なので、などがあげられる。性への関心や関わりの希薄な人程、回答しなくなるのが特徴の一つといえるので、性行動調査の結果は過大評価される傾向があることを認識しておくべきであろう。Strassberg 等の Volunteer Bias in Sexuality Research の論文⁶⁾によると、性行動調査に協力的なものは非協力者よりも性に対して寛容かつ積極的で性行動も活発という事実は、従来の指摘より

もさらに高いと報告している。

4. 回答者の心理的背景

性交渉の定義を付記しておいても読んで理解する人、しない人、読む気になれなかった人、などさまざまである。したがって、個々人の性に対する意識、態度の違いなどによって性的用語を抵抗なく受け入れる人から、これらに拒否的かつ考えることさえ受け入れがたい人などさまざまであり、性行動調査の特異性がここにある。調査結果には、質問紙の性的用語の受容度、理解度などが大きく影響してくる。単に性交渉との表現だけで設問したところでは、性交渉「ある」と答えていても、別設問で性交渉を具体的に記していると、嫌らしい不潔行為ととしてしまい性交渉は「ない」と答えたと思われる回答もあった。今回の調査では、「今まで」にパートナーがいないと答えたものが50歳代の年齢層において20%であった。しかし、50歳代の男女共に9割以上が結婚歴は有ると答えており、一般的には性交渉は配偶者とあったと判断すればほとんどのものはパートナーがいないと答えることはあり得ない。つまり、事実と違った回答といえる。我々は調査開始前に、この点誤解のないように説明はしたのであるが、「膈ベニス性交相手」という表現が理解されなかったのか、配偶者と子供をつくった性交渉はこの設問の性交渉から意識的にはずしてしまったのか、長年、性交渉がなければ「今まで」にないと思って回答したのか、回答の背景に関していろいろと推測される。したがって、性行動調査においては調査相手の性に対する先入観、固定観念などの性意識がベースになって回答状況が左右され、事実の把握をより困難なものにしている。そこで、肝心なのは性的用語ができるだけ受け入れられ、正確に理解し、回答につながるような導入が重要になってくる。この役割は調査員や質問紙の中で果たすべきであり、生き方と同様、性に対する一人一人のいろいろな考えや思いを尊重するスタンスが被調査者にメッセージとして伝わるような基本理念を調査側が具備しておく必要がある。今回、設問中に答えたくないところがあったと回答したものが、男性33人(43%)、女性24人(30%)であった。このうち「過去のこと」や「性的パートナー」について思い出すのが嫌であった、と感想のところに具体的に記したものが男性の33人中6人

(18%)、女性の24人中7人(29%)いた。例えば、現在、結婚し特定パートナーとなっているが、複数パートナーであった過去の自分を思い出したくないとの気持ちもあるであろう。強制的に性交渉を持ってしまったレイプなどのケースもありうる。このような心理状態で調査をする場合、相手の心の奥底を無理矢理開かせ思い出させることで、精神的な苦痛を与えかねない。この手の調査において調査員が心理的な配慮とセックスカウンセリング的な技術を身につけておくことも必要である。

5. 性行動調査のすすめ方

共同研究者の中瀬によると¹⁵⁾、訪問して面前自記と留め置きになったものとの比較では、性的パートナーなどの回答状況にはほとんど差がなかったと結論している。今回の訪問調査を通して、性行動調査など人の私生活に深く介入する調査においては、面前自記と留め置きの何れになるにしても、調査相手に直に会って調査の主旨や選ばれた方法などを十分に説明し納得してもらった上で、調査を実施することが不可欠であると痛感した。特に一般住民からの無作為標本では、調査相手がどのような人なのかまったく背景がつかめない。メール方式などで一方的に調査票を送付し、回答したものだけが一方的に送り返してくる方式では、回答しない人への配慮がまったく欠け、無回答者がこのような調査票を受け取ってどのような思いや背景で回答を出さなかったのか、まったく把握されずに無責任といえる。これでは調査に対する不信を招いてしまうことになる。たとえ訪問調査はできないにしても、調査員が調査相手に直接電話をかけるなどして、お願いや補足説明など最低限必要である。

一般住民からの無作為標本における性行動調査においては、以下の方法が妥当であろう。

- 1) 事前に協力依頼の文書を送る。
- 2) 調査員が本人を訪問し、直接会って調査の主旨と協力をお願いをし質問紙を渡す。
- 3) そのまま面前回答して貰い回収か、留め置きで郵送または訪問回収する。

どうしても訪問ができなければ、

- 1) 事前に協力依頼書を送る。
- 2) 調査員が本人に直接電話で接触し、主旨説明、質問紙を送る旨伝えて了解がとれれば

質問紙を送付する。

3) 郵送回収する。

このように、調査員が調査相手に直接会ったり話すなどの接触を通して協力をお願いすることが、回答の精度と回収率の向上にも大きな効果をもたらすといえる。

V 結 語

HIV/AIDS 予防対策をたてるうえで性行動の実態把握は不可欠である。我々は地域住民を代表する標本を用いて、標本数は200人と少ないが訪問面性調査を実施することでバイアスの少ない高い回収率を達成し、性行動調査に関する方法論の検討を行うことができた。今後、全国規模の性行動調査のモニタリングが実施されることによってHIV/AIDS 予防活動の評価と国際比較が可能となる。Global Program on AIDS (GPA) が、HIV Preventive Behaviour の指標として開発した調査項目は、簡単かつ平易なものとなっている^{5,10,11)}。この中から行動変化の尺度として、(a)過去12ヵ月に少なくとも一人の不特定パートナー (non-regular sex partner) ありと答えた一般住民での割合、(b)過去12ヵ月に不特定パートナーありの中で、不特定パートナーと最後の性交時にコンドームを使用した割合、以上二つで調査した報告がある。この二つの尺度を用いれば、簡便かつ有効にエイズ予防行動の実態把握と評価ができ、地域比較、国際比較も可能ではないかと思っている。

注：不特定パートナーとは、配偶者を除いて回答者が1年未満の性的関係にある相手、と定義している。

本研究は、平成7年度厚生科学研究費エイズ対策研究推進事業における HIV 疫学研究班の一環として実施したものである¹⁶⁾。

(受付 '96.12.13)
(採用 '97. 4.18)

文 献

- 1) Wellings K, et al. Sexual Lifestyles under Scrutiny. *Nature* 1990; 348: 276-278.
- 2) Laumann ED, Gangnon JH, Michael RT, Michaels

S. The Social Organization of Sexuality-Sexual Practices in the United States. Chicago: The University of Chicago Press, 1994.

- 3) Wellings K, Field J, Johnson A, Wadsworth J. Sexual Behaviour in Britain —The National Survey of Sexual Attitudes and Lifestyles—. London: Penguin Books, 1994.
- 4) ACSF investigators, AIDS and sexual behavior in France. *Nature* 1992; 360: 407-409.
- 5) Konings E, Bantebya G, Carael M, Bagenda D, Mertens T. Validating Population Surveys for The Measurement of HIV/STD Prevention Indicators. *AIDS* 1995; 9: 375-382.
- 6) Strassberg DS, Lowe K. Volunteer Bias in Sexuality Research, *Archives of Sexual Behavior* 1995; 24: 369-382.
- 7) ACSF Principal Investigators and their associates. Analysis of sexual behaviour in France (ACSF), A comparison between two modes of investigation: telephone survey and face-to-face survey. *AIDS* 1992; 6: 315-323.
- 8) Bajos N, et al. Sexual Behaviour and HIV Epidemiology; Comparative Analysis in France and Britain. *AIDS* 1995; 9: 735-743.
- 9) Meston CM, Trapnell PD, Gorzalka BB. Ethnic and Gender Differences in Sexuality: Variations in Sexual Behavior Between Asian and Non-Asian University Students. *Archives of Sexual Behavior* 1996; 25: 33-72.
- 10) Mertens T, et al. Prvention Indicators for Evaluating the Progress of National AIDS Programmers. *AIDS* 1994; 8: 1359-1369.
- 11) World Health Organization; Protocol for Repeated Survey for the General Population. Geneva: WHO; 1994 (WHO/GPA/TCO/SEF/94).
- 12) 日本性教育協会編. 「青少年の性行動 第4回」報告書. 東京: 財団法人日本性教育協会, 1994.
- 13) 東 優子. 「セックス・イン・アメリカ」を読む. 性と生の教育 1996; 6: 64-67.
- 14) 内野英幸, 他. 老人の性に対する公衆衛生的なアプローチ. *日本公衛誌* 1994; 41: 262-268.
- 15) 中瀬克己, 内野英幸. 地方中核都市における性行動を通じての HIV 感染リスクと性行動変化に関連する要因. 厚生省「HIV の疫学と対策に関する研究」班平成7年度研究報告書, 1995; 578-581.
- 16) 内野英幸. 一般住民の性意識と性行動に関する比較社会学的研究. 厚生省「HIV の疫学と対策に関する研究」班平成7年度研究報告書, 1995; 546-581.

A SURVEY ON SEXUAL AWARENESS AND BEHAVIOUR OF RESIDENTS OF A PROVINCIAL CITY

Hideyuki UCHINO*

Key words: Sexual behaviour, Population survey, HIV infection risk, Multiple partners, Survey evaluation

For better understanding of the sexual behaviours that are high-risk in terms of HIV infection, a random sample of 200 people aged above 20 and below 60 years, from a population of 23,700, was selected in the provincial city of Nagano and surveyed by visitation. The responses of 156 people (a rate of response of 78%) were collected and the results were statistically analyzed. The methods employed in conducting a survey on sexual behaviour were also evaluated.

The number of sexual partners is an indicator of high-risk sexual behaviour for HIV infection. The data reveals that 65.3% of the men and 37% of the women had two or more partners in the past, with 37.5% of the men and 12.5% of the women having two or more partners in the last 5 years, and 19.1% of the men and 4.2% of the women having two or more partners in the last year, revealing that a higher percentage of men than women have multiple partners. Comparison by age group reveals that young men and women in their 20s have the highest percentage of multiple partners. For both men and women first sexual intercourse before the age of 18, for men self-employment, being a craftsmen or in agriculture, and for women, higher education, were all factors in having greater numbers of partners.

In conducting a survey on sexual behaviour the following should be kept in mind.

- 1) The psychological background of the respondent;

Sex counseling skills are required on the part of the interviewer when taking a survey on sex since it is a very private and personal topic for people. Respondents have a tendency to be those who are open-minded about sex and are active in life, and these factors can exaggerate the survey results.

- 2) Conduct of a survey on sexual behaviour;

The survey should be taken only after the purpose of the survey has been fully explained to the respondents and trust has been established.

In principle, therefore, mailing of a letter of request and the actual questions should not be the method utilized prior to the collection of responses.

* Omachi Health Center, Nagano Prefecture